No. 74

コロンビア共和国
地震災害救済
国際緊急援助隊救助チーム報告書

平成11年4月

JICA LIBRARY
J 1158406 [7]

国際協力事業団
国際緊急援助隊事務局

国緊
JR
99-1

コロンビア共和国
地震災害救済
国際緊急援助隊救助チーム報告書

平成11年4月

国際協力事業団
国際緊急援助隊事務局

1158406[7]

序　　文

平成 11 年 1 月 26 日午前 3 時 19 分（現地時間 1 月 25 日午後 1 時 19 分）、震度 6.0 の地震がコロンビア共和国（以下、コロンビアと略す）西部にて発生しました。同国政府は、人的、物的両面にわたる甚大な被害に鑑み、わが国に対し緊急援助を要請しました。

日本国政府の決定に基づき、国際協力事業団は、国際緊急援助隊救助チームおよび医療チームの派遣、物質の供与を行いましたが、本報告書は 1 月 26 日から 2 月 4 日の間、被災地アルメニアに派遣され、捜索・救出活動を行った国際緊急援助隊救助チームの活動を取りまとめたものです。

距離的なハンディを乗り越え、海外の救助チームとしては米国救助チームに引き続き、2 番目に現地入りしました。被災地および他国の救助チームとも協力し、精力的な活動を行ったわが国の救助チームは、コロンビア国民のみならず、国際的にも大きな賞賛を得るところとなりました。迅速な派遣および活動を達成した今次経験を取りまとめた本報告書が、今後の救助チームの活動強化に資することを期待します。

終わりに、この度の地震にて命を落とされた方々のご冥福と一日も早い被災地の復旧をお祈りするとともに、この度の国際緊急援助活動にご協力とご支援をいただいた皆様に対し、こころから感謝の意を表明します。

平成 11 年 4 月

国際協力事業団
理事　阿部　英樹

写真１　アルメニア市内被災状況

写真２　アルメニア市内被災状況

写真３　アルメニア市内被災状況

写真４　アルメニア市民防衛局（Civil Defense）の活動

写真５　アルメニア市民防衛局
(Civil Defense) の活動

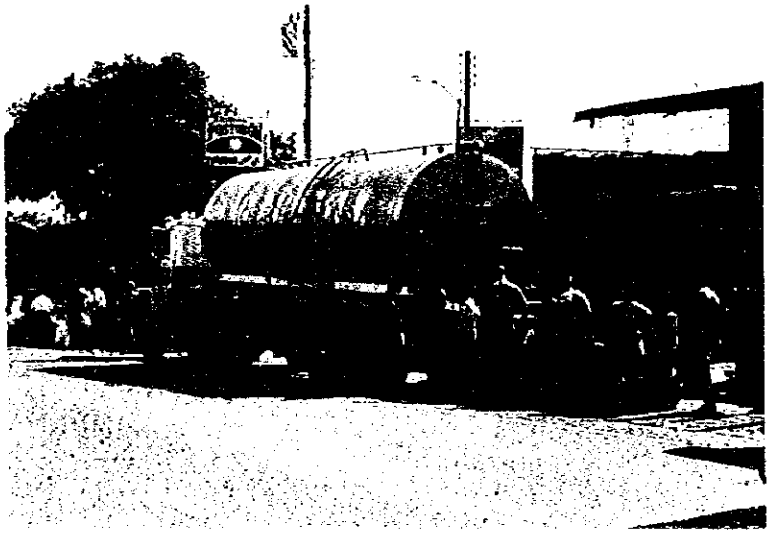


写真６　給水活動

写真７　携帯型ファイバースコープ
による生存者検索

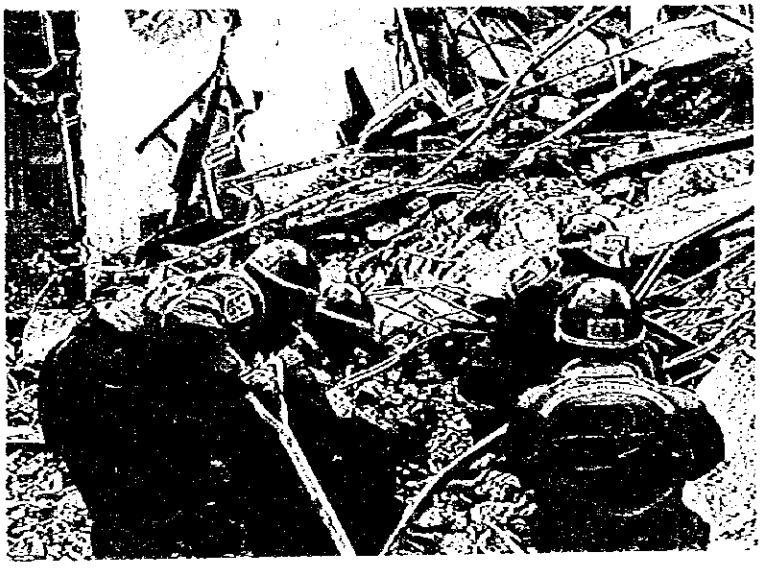
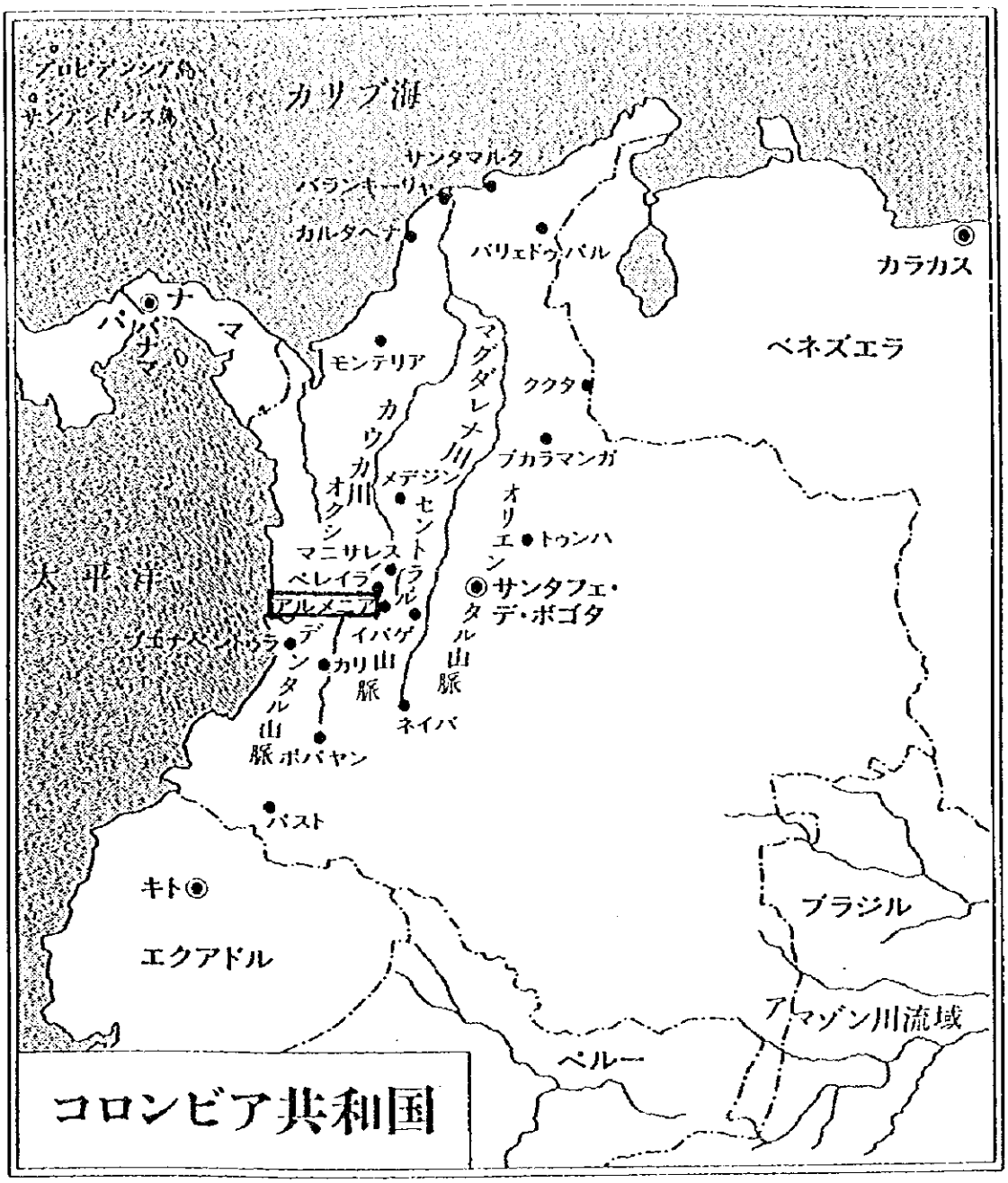


写真８　携帯型ファイバースコープ
による生存者検索

写真９　連絡会議（１／29）に
出席した各国救助チーム

写真 10　供与した物資の一部


カリブ海
プロビデンシア島
サンアンドレス島
サンタマルタ
バランキーリャ
カルタヘナ
バリェドゥパル
カラカス
ベネズエラ
パナマ
モンテリア
ククタ
マグダレメ川
カウカ川
ブカラマンガ
メデジン
オクシデンタル山脈
オリエンタル山脈
トゥンハ
マニサレス
ペレイラ
アルメニア
サンタフェ・デ・ボゴタ
太平洋
イバゲ
カリ
デ
ンタル山脈
ポパヤン
ネイバ
パスト
キト
エクアドル
ブラジル
アマゾン川流域
ペルー
コロンビア共和国

目　　次

序　文
地　図
写　真

I．災害概要 ……1
　1．災害の概要 ……1
　2．被害の概要 ……1
　3．コロンビア政府の対応 ……2

II．活動内容 ……3
　1．派遣までの経緯 ……3
　2．派遣期間・日程 ……3
　3．派遣目的・任務 ……4
　4．派遣メンバー ……4
　5．活動概要 ……6
　　5－1　主な活動……6
　　5－2　活動条件……7
　　5－3　活動現場……7
　　5－4　他国の援助動向及び協力関係……9
　　5－5　撤収判断……9
　6．活用した資機材 ……10
　7．現地の受け入れ体制 ……10

III．活動成果 ……12
　1．救助成果 ……12
　2．顔の見える国際協力 ……12

IV．隊員の生活状況 ……13

V．医療班報告 ……14
　1．時間経過 ……14

2．活動実績 ……15
3．問題点と提言 ……16
4．まとめ ……20

Ⅵ．業務調整員ロジスティックス報告 ……23
1．渉外・広報 ……23
2．活動環境整備 ……23
3．移動・輸送 ……24
4．機材管理 ……25
5．生活環境整備 ……25
6．報告・記録 ……26
7．その他 ……27

Ⅶ．総括 ……32

巻末資料
1．活動報告（日誌） ……41
2．携行機材リスト ……56
3．コロンビア商工会議所からの感謝状 ……65
4．被災状況関連資料 ……67
5．報道関連資料（国内紙、現地紙） ……72

Ⅰ．災害概要

1．災害の概要

発生時刻：	1999年1月25日（月）　午後1時19分
	（日本時間：1月26日（火）　午前3時19分）
地震の規模：	マグニチュード6.0
震源地：	北緯4度25分12秒　西経75度42分00秒
	キンディオ（Quindio）県コルドバ（Cordoba）町
	（アルメニア市の南16km）
震源の深さ：	約10km

2．被害の概要

＜被災地域＞

コロンビア共和国（西部キンディオ県、リサラルダ県、バジェ・デル・カウカ県、トリマ県、カルダス県等）

＜被災者数＞

●コロンビア国家警察発表による1月26日午後3時（現地時間）時点の被災状況

○人的被害：	死者数	700人以上
	負傷者数	2,000人以上
	行方不明者	多数
	被災者数	数千人
○物的被害：	全壊・半壊家屋数	多数

●国連人道問題調整事務所（UN OCHA Situation Report）による2月19日現在の被災状況

○人的被害：	死者数	1,171人
	負傷者数	4,765人
○物的被害：	全壊・半壊家屋数	多数

○避難所及び避難者数

地区	避難所数	避難者数
ARMENIA	13	9,800
PUAO	10	4,365
CORDOBA	15	3,700
CALARCA	15	1,842
LATEBAIDA	25	22,674
BUENAVISTA	7	450
BARCELONA	-	2,850
CIRCASIA	17	13,300
QUIMBAYA	4	4,558
MONTENEGRO	7	4,000

合計 67,539

3．コロンビア政府の対応

地震発生後、コロンビア政府は1月 25 日、パストラーナ大統領、内務大臣、保健大臣等が現地入りした。その後、大統領は首都で緊急対策委員会を主宰している。また、国民からの支援物資及び資金の募集を開始するとともに、被災民の民間空港への商業フライトの運行を停止し、援助物資、医療などの関係者の輸送及び負傷者の近隣都市への移動のみに限定した。

被害の甚大さに鑑み、コロンビア政府は現地時間1月 26 日未明（日本時間：1月 26 日午後）、我が国に対し、緊急援助隊（救助チーム）の派遣及び緊急援助物資供与を要請した。

コロンビア政府はさらに翌日、緊急援助隊（医療チーム）の派遣を我が国に要請した。

災害対応機関

国際災害対策本部、コロンビア軍、コロンビア Civil Defense、キンディオ県、アルメニア市、アルメニア消防署、コロンビア赤十字、外務省国際協力局／アジア・アフリカ・大洋州局（外国チーム受入）等

Ⅱ．活動内容

１．派遣までの経緯

コロンビア政府の要請を受け、日本国政府は、１月 26 日 16：35 に救助チームの派遣を正式決定し、コロンビア地震災害救済国際緊急援助隊・救助チームは同日 18：15 発（実際の出発時刻は 18：52）シンガポール航空にて、ロス・アンゼルス経由でコロンビアに向かった。当初は１月 26 日から２月８日までの２週間の派遣期間を設定したが、現地で状況判断の上、以下のとおり期間を短縮し、２月４日までの 10 日間となった。

２．派遣期間・日程

派遣期間：平成 11 年１月 26 日（火）～２月４日（木）

日数	月日	旅程	内容	宿泊地
1	1/26 火	成田→ L.A.→	（表記は日本時間） 16:35 派遣決定 17:30 成田空港にて結団式 18:52 離陸 5:02 ロス・アンゼルス空港着→ホテルで休憩 10:00 ホテル出発 12:30 ロス・アンゼルス離陸 21:00 現地時間 1/27 午前７時 ボゴタ空港着→機材引き取り	機中泊
2	27 水	ボゴダ→ アルメニア	（以降、表記は現地時間） 7:00-10:15 ボゴタＪＩＣＡ事務所と打合わせ、C-130 への機材積み込み 10:45 C-130 離陸 11:30 アルメニア空港着→ヘリ５機に分乗し、アルメニア市内へ 14:40 最終便アルメニア市内着 15:30 被災現場入り、救出活動開始 17:10 遺体１体収容 （1/28） 0:45 遺体１体収容 1:15 活動終了 2:00 宿舎到着 3:30 就寝	アルメニア
3	28 木		終日救出活動	アルメニア
4	29 金		終日救出活動 午前９時、午後９時に各国間連絡会議出席	アルメニア
5	30 土		午前　機材、対策本部撤収作業 午後　周辺被災地視察 夕方　第８軍ヘルナンデス司令官夕食会	アルメニア
6	31 日	アルメニア →ボゴタ	午前　救助機材贈呈式 首都ボゴタへ移動 ホテルで全体ミーティング 夕方　ＪＩＣＡ所長主催夕食会	ボゴタ
7	2/1 月		午前　外務省、災害復旧対策本部へ活動報告 夕方　日本国大使主催隊員慰労会	ボゴタ
8	2 火	ボゴタ→	15:00 ホテル出発 19:30 離陸	機中泊
9	3 水	→ＮＹ→	5:00 ＮＹ着（濃霧のため途中フィラデルフィア空港で待機） 6:30 ホテル着 9:30 ホテル発 12:10 ＮＹ離陸	機中泊
10	4 木	→成田	（以降表記は日本時間） 16:10 成田着 16:45 解団式→18:00 解散	

3．派遣目的・任務

コロンビア関係機関および他国援助機関と協力し、地震による被災者の捜索、発見、救出、応急措置、安全な場所への移送などの活動を行う。

4．派遣メンバー

計37名

外務省（団長）1名、消防庁15名、警察庁15名、医師1名、看護婦1名、

業務調整員（ＪＩＣＡ）4名（うち1名は現地参加）

メンバーリスト

No.	フリガナ 氏名	担当業務	所属先	派遣期間
1	シラカワ ミツノリ 白川　光徳	総　　括	外務省国際緊急援助室	H11.1.26～2.4
消　防				
2	キタデ マサトシ 北出　正俊	副 総 括	自治省消防庁救急救助課	H11.1.26～2.4
3	ホソダ マサオ 細田　正夫	司　　令	東京消防庁警防部多摩司令室	H11.1.26～2.4
4	アベ アキラ 阿部　光	救急救助	東京消防庁警防部救助課	H11.1.26～2.4
5	タケイズミ サトシ 竹泉　聡	救急救助	東京消防庁警防部救助課	H11.1.26～2.4
6	ニシハラ ケンジ 西原　健治	救急救助	東京消防庁警防部警防課	H11.1.26～2.4
7	ヨシダ コウ 吉田　耕	救急救助	東京消防庁第二方面消防救助機動部隊	H11.1.26～2.4
8	シノハラ クニタカ 篠原　邦隆	救急救助	東京消防庁第八方面救助機動部隊	H11.1.26～2.4
9	イガラシ ヒロアキ 五十嵐　裕明	救急救助	東京消防庁目黒消防署	H11.1.26～2.4
10	イワマ ヒロミツ 岩間　弘光	救急救助	東京消防庁城東消防署	H11.1.26～2.4
11	ナカイ トクオ 中居　徳夫	救急救助	大阪市消防局警防部救助課	H11.1.26～2.4
12	ノロ タダシ 野呂　忠司	救急救助	大阪市消防局生野消防署	H11.1.26～2.4
13	イシノ カズヨシ 石野　一義	救急救助	千葉市消防局緑消防署	H11.1.26～2.4
14	ナガノ タカユキ 永野　隆行	救急救助	千葉市消防局若葉消防署	H11.1.26～2.4
15	ヨシダ カズユキ 吉田　和行	救急救助	船橋市消防局中央消防署	H11.1.26～2.4
16	サトウ ショウゴ 佐藤　尚吾	救急救助	船橋市消防局中央消防署	H11.1.26～2.4

No.	フリガナ 氏名	担当業務	所属先	派遣期間
			警　察	
17	ﾜﾀﾅﾍﾞ ｶｽﾞｵ 渡邊　和雄	副　総　括	警察庁国際部国際第一課	H11.1.26～2.4
18	ｵｵｼﾏ ｴｲｼﾞ 大嶋　英治	司　　令	大阪府警察本部第一機動隊	H11.1.26～2.4
19	ﾀｹｵ ﾕｳｼﾞ 武尾　祐司	救急救助	大阪府警察本部第一機動隊	H11.1.26～2.4
20	ﾐｽﾞｼﾏ ﾄｵﾙ 水嶋　享	救急救助	大阪府警察本部第一機動隊	H11.1.26～2.4
21	ｳｴﾉ ﾀｸﾏ 上野　琢磨	救急救助	大阪府警察本部第二機動隊	H11.1.26～2.4
22	ｸﾗﾊﾗ ﾀﾂｵ 倉原　達生	救急救助	大阪府警察本部第二機動隊	H11.1.26～2.4
23	ﾅｶﾉ ﾂﾖｼ 中野　毅	救急救助	大阪府警察本部第二機動隊	H11.1.26～2.4
24	ﾕｷﾅﾘ ｼﾝｲﾁﾛｳ 行成　慎一郎	救急救助	大阪府警察本部第三機動隊	H11.1.26～2.4
25	ﾀﾆｸﾞﾁ ﾉﾘﾋｻ 谷口　倫久	救急救助	大阪府警察本部第三機動隊	H11.1.26～2.4
26	ｳｼﾛ ﾋﾃﾞｷ 後　英樹	救急救助	大阪府警察本部第三機動隊	H11.1.26～2.4
27	ｶﾜｲ ﾄﾓﾋﾄ 河合　智人	救急救助	兵庫県警察本部機動隊	H11.1.26～2.4
28	ﾅﾀﾞ ﾏｻｱｷ 灘　正秋	救急救助	兵庫県警察本部機動隊	H11.1.26～2.4
29	ﾔﾏｼﾀ ｶｽﾞﾕｷ 山下　和之	救急救助	兵庫県警察本部機動隊	H11.1.26～2.4
30	ﾂｼﾏ ﾂﾖｼ 津島　剛志	救急救助	兵庫県警察本部機動隊	H11.1.26～2.4
31	ﾄﾀﾞ ﾄｼﾕｷ 戸田　寿幸	救急救助	兵庫県警察本部警備部機動隊	H11.1.26～2.4
			医　療　班	
32	ﾖｼﾅｶﾞ ｶｽﾞﾏｻ 吉永　和正	救急医療	兵庫医科大学	H11.1.27～2.4
33	ｿｶﾍﾞ ﾙﾐｺ 曽我部るみ子	救急看護	東京警察病院	H11.1.27～2.4
			ＪＩＣＡ業務調整員	
34	ｶﾜｼﾞ ｹﾝｲﾁﾛｳ 川路　賢一郎	業務調整	国際協力事業団調達部管理課	H11.1.27～2.4
35	ｽｽﾞｷ ｱｷﾗ 鈴木　彰	業務調整	国際協力事業団医療協力部医療協力第二課	H11.1.26～2.4
36	ﾏﾂｳﾗ ﾕｶｺ 松浦　由佳子	業務調整	国際協力事業団国際緊急援助隊事務局災害援助課	H11.1.27～2.4
37	ﾌｶｻﾜ ｷﾐｵ 深澤　公雄	業務調整	国際協力事業団コロンビア事務所	H11.1.27～2.2

5．活動概要

5－1　主な活動

（1）1月 26 日、救助チームはほぼ定刻どおりロス・アンゼルスに到着し、空港でわずかな休息をとった後、コロンビアへ向かい、27 日午前7時過ぎ（現地時間）にコロンビアの首都ボゴタ市に到着した。携行機材引き取り後、直ちに空港敷地内の空軍基地からコロンビア空軍輸送機により被災地アルメニア市に向かい、同日正午頃現地に到着した。

（2）被災地入り直後から、チームは直ちに救助活動を開始した。雷雨の中、翌 28 日未明まで 14 時間半にわたり、携行した資機材を使用して、被災者の捜索・救助活動を行い、男性1名、女性1名の遺体を発見・収容した。

（3）救助チーム後発隊はマイアミを経由し 28 日午前 11 時過ぎコロンビア・ボゴタ市に到着後 14 時 30 分発の便でカリ市へ移動し、陸路現地アルメニアに向かい夕刻本隊に合流した。

（4）チームは1月 28 日も早期より救助活動を行い、新たに男性1名、女性1名の遺体を発見・収容した。

（5）1月 29 日、チームは早朝より昨日に引き続き市内中心部の現場で2班に別れて救助活動を行い、午前 10 時過ぎに、崩壊した 12 階建てビルの現場で女性の遺体を発見・収容した。その後も精力的に救助活動を継続したが、生存者及び遺体の発見はなく、午後7時頃活動を終了した。

（6）一方、1月 29 日に午前9時からと午後9時からの2回にわたり、パッカ市民防衛庁長官（Civil Defense）主催による各国救助チーム連絡会議が開催され、既に生存者が残されている可能性は極めて薄いため、30 日午前中の仏チームによる探査活動実施を除き、生存者の救出活動は本日をもって終了する旨、パッカ長官から通知されるとともに各国救助チームへ感謝の意が表明された。これを受け、チームは 29 日をもって活動を終了し、予定期間を短縮し帰国することを決定した。

（7）1月 30 日、午前中チームは撤収作業を行い、機材の点検及び手入れをするとともに、削岩機、エンジンカッター、投光器等のレスキュー機材をアルメニア消防署及び市民防衛庁（Civil Defense）に供与することで先方関係者と協議を行った。午後３名の隊員はアルメニア市内の被災状況及び関係施設の調査を行い、他の隊員は近隣のペレイラ市に被災状況の視察を行った。また、白川団長及び川路調整員は、第８軍駐屯地に設置された活動対策本部の撤収を行うとともに、市民防衛庁本部を訪問し供与機材について協議を行った。夕方には、同基地のヘルナンデス司令官（大佐）から夕食に関係者全員が招待を受け、基地内の食堂にて司令官及び同夫人から心のこもったもてなしを受けた。

（8）1月 31 日、８時より市民防衛庁本部において日本側から白川団長、渡邊、北出両副団長、豊在コロンビア日本国大使館二等書記官、コロンビア側からタヴァレス・キンディオ県知事、パティニョ・アルメニア市長、バッカ・市民防衛庁長官他関係者多数が出席のもと、救助用資機材の供与式が行われた。その後、チームは午前 10 時頃C-130 輸送機によりアルメニア空港を離陸し、ボゴタに到着後 11 時 30 分ホテルに入った。

（9）2月１日、チームは日本大使館へ活動報告を行うとともに、先方外務省アジア・アフリカ・大洋州局長及び国家災害対策本部日本チーム担当官へ報告を行った。

５－２　活動条件

午前中の気温は 15℃～20℃だが、日中は時折強い日差しのため 25℃程度まであがることもあった。また、夕方には一時的に激しいスコールに見舞われることがあった。

さらに、活動期間中、震度１～２程度の余震が度々生じていた。

５－３　活動現場

アルメニア市民防衛庁（Civil Defense）と協議の上、先方から要望のあったアルメニア市市役所周辺の以下４カ所で救助活動を行うこととした。

①第一現場：12 階建てビル（ホテル等）
②第二現場：２階建て複合ビル（１階店舗、２階共同住宅、弁護士事務所等）
③第三現場：５階建てビル（ホテルアルメニアプラザ）
④第四現場：４階建てビル（倉庫、共同住宅）

また、コロンビア軍から第８軍駐屯地の１室を借り、通信機器等を設置し、日本チームの対策本部とした。なお、活動地であるアルメニア市の概要は以下のとおり。（参考）

●キンディオ（Quindio）県の県庁所在地

●人口 290,000 人
（内訳）
市街区域：　200,000 人
農村区域：　90,000 人

●行政区域面積 12,133ha
（内訳）
市街区域：　2,253ha
農村区域：　9,879ha
＊市街区域は、更に中心市街地、周辺市街地、拡大市街地及びその他に分けられる。

●標高　海抜 1,483 メートル

●産業経済
コーヒーの生産と出荷を中心とする地方経済である。アルメニアは、リサラルダ県の県都ペレイラ、カルダス県の県都マニサレスとともにコーヒー三角地帯と言われ、コーヒー枢軸を構成するコロンビア経済にとって重要な都市の一つとされている。

●地形・気候
アンデス中央山脈の西の裾野に位置し、火山灰質の肥沃な土壌と気候に恵まれている。アルメニアの年間平均気温は 20 度。月平均気温もほぼ同じで、一年中変わらず東京の９月を思わせる気候である。年間降雨量は、2,500mm。５月と 10 月をピークとする雨季と１月、８月をピークとする乾季がある。

●都市構造
南部、北部、中心部の３つの区域に大まかにわけられる。南部は低・中所得者層の住宅地、北部は中・高所得層の住宅地となっており、中心部は商店、オフィスの多い商業地区となっている。
南部には、住宅とともに町工場、倉庫、コーヒー脱穀工場などが混在している。周辺部の住宅地は近年（10 年から 15 年）に形成された新興住宅地であり、谷地の埋め立てなどの荒っぽい造成地が見られる。
北部には住宅とともに、ペレイラ街道沿いに商店が立地している。住宅は平屋、２階建てから５階建て以上のアパートが混在している。
中心部は、商店や銀行、オフィスビル、商業業務用兼アパートなどの密度の高い地域となっている。最も高いビルは、ボリーバル広場に面する県庁舎で、20 階建てである。

５－４　他国の援助動向及び協力関係

本災害にかかる他国及び国際機関の対応

米州機構（ＯＡＳ）：	2,000万ドル
ＥＵ：	176 万ドル
欧州委員会：	100 万ユーロ
世界銀行：	住宅建設へのクレジット
米国：	救助チーム（62名）の派遣、ＵＳＡＩＤ災害局からの人道援助
スペイン：	34.5万ドルの緊急物資、捜索犬７匹を伴う援助チームの派遣
チリ：	医薬品、食糧等
メキシコ：	救助チーム（32名）の派遣
独、仏：	専門家チーム（55名、協力分野：災害、瓦礫撤去）　他

本チームとの協力関係

救助チームとしては、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、スペイン、メキシコ、ヴェネズエラ、ロシア、中国からチームが駆けつけており、日本チームは、スペインチーム、ロシアチーム等と協力して活動を行った。

また、活動期間中、軍大隊施設（Batallon Cisneros)にてアルメニア市市民防衛庁（Civil Defense）の主催による各国チーム間連絡会議が行われ、各国救助チーム間の連絡調整が行われた。

５－５　撤収判断

1月 29 日（金）21：00 から行われた上記各国チーム間連絡会議において、アルメニア市 Civil Defense 側から、生存者救出の可能性が極めて小さくなっている状況を踏まえ、救出作業は本日をもって終了し、以後復旧活動に重点をシフトしたい旨の通知があるとともに、各国救助チームに対し、感謝表明と撤収依頼があった。

これを受け、日本チームも当初予定を繰り上げ、翌日 30 日（土）から機材等の撤収作業を開始することとした。

６．活用した資機材

破壊用機材：削岩機、エンジンカッター、ストライカー、ハンマー、つるはし、スコップ等

探索用機材：電磁波探査機、携帯型ファイバースコープ、地中探査機

搬送用機材：救助用タンカー

個人装備：　防毒マスク、協力ライト、防塵メガネ、ケブラー手袋、ヘッドランプ等

通信機材：　インマルサット、無線等

その他：　投光器、発電機等

（P56 別添携行機材リスト、P30 救助隊員アンケート結果及び巻頭写真参照）

７．現地の受け入れ体制

コロンビア政府：ボゴタ国際空港での機材通関、隊員の入国審査等について全面的な協力が得られた。

アルメニア市：市民防衛庁（Civil Defense）が救助チームの受入担当窓口となり、活動場所の調整等を行った。コロンビア軍も受入に全面的に協力し、首都ボゴタと被災地アルメニア市の往復の移動のために、軍用機C-130 及びヘリコプターのアレンジを提供してもらった。また、カリ市経由で現地入りした後発隊（ＪＩＣＡ業務調整員２名、医務班２名）がカウカ県治安管理局（ＤＡＳ:Departomento Administratio de Securidad）と協議を行った結果、カリ市ＤＡＳ職員４名が出動し、日本チームの安全確保、警備を行ってくれた。

在コロンビア日本国大使館：災害発生後、直ちに被災状況の把握にとりかかるとともに、国際緊急援助隊救助チーム及び医療チームの受入準備、浅見大使指揮のもと、コロンビア外務省関係部局、キンディオ県知事、コロンビア軍等関係機関等との調整を行った。また、定野一等書記官、豊二等書記官が被災地に赴き、救助チームの活動支援にあたった。

ＪＩＣＡコロンビア事務所：所長、次長、所員１名、青年海外協力隊調整員、現地職員が総出で緊急援助活動支援にあたった。うち所員１名、青年海外協力隊調整員１名、現地採用職員１名、臨時雇用通訳１名がチームに同行し被災地に赴き、宿舎確保、車輌手配、食糧、飲料水、生活用品等の現地調達を行った。又、被災地近隣で活動中の６名の青年海外協力隊員が参加した。

現地での日本側協力者一覧

日本大使館：

浅見　　真	在コロンビア　特命全権大使
古賀　京子	参事官
定野　了三	一等書記官
豊　　輝久	二等書記官
伊藤　秀治	専門調査員　他

ＪＩＣＡ：

古屋　年章	所長
上篠　直樹	次長
深澤　公雄	所員（業務調整員として活動に参加）
菊池　威臣	青年海外協力隊調整員
石田	現地採用所員
高瀬	現地採用所員
James Dias	現地採用所員
Juan Manuel Msoquera	現地採用所員　他
九曜美智子	青年海外協力隊員（ペレイラ市役所・家政）
福澄　聡子	青年海外協力隊員（リサラルダ開発公社・青少年活動）
篠　　克彦	青年海外協力隊員（国際有機農業センター・組織培養）

Ⅲ．活動成果

1．救助成果

生存者の救出には至らなかったものの、精力的な活動により、日本チームは以下の遺体を発見、収容した。

日時	時間	救助内容	場所
1月27日（水）	17：10	男性1名（40～50歳）の遺体を収容	第二現場
	0：45（1/28午前）	女性1名（50～60歳）の遺体を収容	第四現場
1月28日（木）	17：10	女性1名（38歳・主婦）の遺体を収容	第二現場
	18：13	男性1名（年齢不詳）の遺体を収容	第一現場
1月29日（金）	10：25	女性1名（16歳・学生）の遺体を収容	第一現場

合計　遺体5体を収容

2．顔の見える国際協力

地震が発生してから約15時間後には成田空港を出発し、米国救助チームに次ぎ、2番目に現地入りした本救助チームの迅速な対応は、コロンビア国内、日本国内のみならず、米国その他ドナー国でも注目され、各紙で報道された。

チームは現地アルメニア入りした直後の午後3時過ぎから、救出活動を開始し、27時間にも及ぶ長旅の疲れを癒すことなく、翌日午前一時過ぎまで捜索、救出活動を続けた。活動にあたり特に配慮した点は、生存者及び遺体を損傷しないように重機の取扱い等に細心の注意を払ったことである。

こうした日本チームの救助活動は、現場の被災民の心を打ち、活動中は連日にわたり、昼食、コーヒー、おやつ等の差し入れや休憩場所の提供がなされた他、撤収後に立ち寄った近隣都市のレストランでは200人ほどの客から盛大な拍手で迎えられるという場面もあった。

さらに、平成10年度に国際協力事業団研修員受入事業において、「救急救助技術」コース（受入先：大阪府消防局）に参加したコロンビア・メデジン市Civil Defenseの職員Juan氏が、被災地アルメニア市に応援要員として駆けつけていた。今次日本チームには、大阪市消防局から中居隊員、野呂隊員が参加していたが、特に中居隊員はJuan氏来日当時、研修指導官として受入を担当しており、被災地でのJuan氏との再会は大きな喜びとなった。Juan氏は、自ら志願して日本チームとともに活動し、現地Civil Defenseと日本チームの橋渡し役として活躍した。日本で学んだ技術が活かされ、ともに活動できたことが、双方にとって大きな励ましとなった。

Ⅳ．隊員の生活状況

アルメニア市中心部から車輌で１時間弱程度離れた郊外の農家２棟を借り上げ、宿舎とした（ブラジリア、フランチェスカ）。

ブラジリア：警察チーム、業務調整員、青年海外協力隊員

フランチェスカ：団長、消防チーム、大使館員

宿舎では、電気、水道等の基本的なライフラインも寸断されており、日が暮れてからはろうそく、懐中電灯による生活を余儀なくされた。トイレやシャワーは、農場のプールに溜まった水を利用した。

また食事は自炊で、青年海外協力隊員が警察チームの宿舎となったブラジリアにて、食事の用意をし、全員が朝食、夕食ともにブラジリアにて食事をとった。

また、日を追うにつれ、治安が悪化し、宿舎周辺で銃声がすることがあったものの、アルメニア市警察による警備員及び番犬による警備を配置し、トラブルに巻き込まれることはなかった。

V．医療班報告

医師　吉永和正（兵庫医科大学救急部）
看護婦　曽我部るみ子（東京警察病院）

1．時間経過

日本時間	現地時間	
1999年		
1月26日	1月25日	
03：19	13：19	地震発生
23：00		ＪＩＣＡより派遣要請（救助チーム同行）
1月27日		
17：00		成致集合
18：40		ＡＡ26
	1月27日	
	21：00	Miami 着
	1月28日	
	8：25	ＡＡ913
	11：45	Bogota 着→Cali へ民間機で移動
	16：00	Cali 出発（乗用車）
	19：00	Armenia 着
	1月29日	Armenia 市内で救助活動
	1月30日	撤収準備
		ＪＤＲ医療チームと接触
	20：00	ＡＶ0230　Cali→Bogota
	1月31日	救助隊 Bogota へ移動
	2月1日	大使公邸慰労会
	2月2日	
	19：00	ＡＶ0020　Bogota 発
	2月3日	
	5：00	New York 着
	12：10	JAL005
2月4日		
15：30		成田着
16：30		解団式

2．活動実績

診療

1月29日

① 32歳、女性　右手小指切創　投薬

② 34歳、男性　感冒、喉頭炎

1月30日

① 32歳、女性　再診

② 34歳、男性　再診（他医療機関受診）

③ 51歳、男性　左示指挫創　処置、投薬

④ 男性　中耳炎疑い　投薬

1月31日

① 34歳、男性　再診

② 28歳、男性　皮疹　経過観察

③ 29歳、男性　下痢　経過観察

2月1日

① 34歳、男性　再診

② 49歳、男性　急性腸炎　投薬

③ 25歳、男性　右足虫咬傷　経過観察

8名で延べ12回の診療

問診票（体調管理、ＳＤＳ）（添付資料）

1月29日

1月31日

2月3日

ＪＤＲ救助チーム体調変化

	1/29	1/31	2/3
便秘	9	5	1
下痢	0	1	4

（隊員30名）

ＳＤＳの個人合計点の推移

上昇	9
低下	17
不変	3
不明	2

隊員の所属地を関東、関西に分けた場合のＳＤＳの推移

	関東	関西
上昇	7	2
低下	6	10
不変	0	3
不明	1	1

血圧測定

1月30日９～10AM（朝食後）

Hospital San Jaun de Dios 訪問（1/30）

Jorge Lopez 院長へ医療資器材一部を供与

３．問題点と提言

今回の救助チームに参加して、問題と感じた点を時間経過にしたがって述べる。

（１）戸籍抄本

パスポート作成に当たって、６ヶ月以内に発行された戸籍抄本の提出を求められた。私（吉永）の本籍地は岡山であり、直接出向くほどの時間的余裕はない。幸いにして、親戚に依頼して朝一番で入手できたので、今回の出発には間に合ったが、時間帯や親戚の都合では入手不可能であったかもしれない。個人で準備せねばならない者にとってはこの条件は非常に厳しいと言わざるを得ない。より効果的な方法を考慮していただきたい。

（事務局注：現行では、パスポート発給申請の際に戸籍抄本を提出することとなっている。）

（2）問診票

出発直前に健康管理のための問診票を作りたいとの希望が伝えられた。さらに、心理面のチェックもしたいとのことであった。回答までに１時間ほどしか余裕がなく、思いつくままに問診票を作成した（別添１）。また、心理面の調査用にＳＤＳ（Self-rating Depression Scale）が現場で使用するには質問項目もそれほど多くなく、使いやすいとの情報を得たので、これを準備した。

しかし、短時間で作成した問診票であり、チェックリストであって、これが適切なものであるか否かの検討をする時間的余裕はなかった。問診票からは現地でそれほど大きな訴えもなく、体調を崩す隊員もほとんどいなかった。問診票で何か問題があった場合はこちらから積極的に問いかけ診察を行った。問診の結果として興味があるのは初期に便秘を訴える者が多かったのが、時間とともにこれは減少した。一方、帰国前には下痢を訴える者がでてきた。便秘は環境の変化、緊張、補給水分の減少、トイレ事情の悪さによる我慢などが原因として考えられる。初期にはトレイはプールの水を自分でくんでトイレで流すという状況であったが、後半はホテルで通常の水洗トイレが使用可能となった。問診票はこのようにスクリーニングとしては有用であったと考えられる。

ＳＤＳについても明確な意図を持って採用したわけではないが、災害医療の現場で短時間でチェックが可能とのことで採用した。その結果にはいくつか興味ある結果がみられる。

ＳＤＳはうつ状態を知るためのスケールで、20 項目の質問よりなっており各回答に１～４点を付けて合計を出す。３回の問診票と同時にチェックしたが合計点の推移をみると上昇（悪化）９、低下（改善）16、不変３、不明２であった。これらの変化を隊員の所属別で関東、関西に分けると明らかな違いがみられるようになる。関東では上昇７、低下６に対して関西では上昇２、低下 10、不変３と、関西で上昇を示す者が少ない。関西の隊員の多くは震災を身近に経験しており、これが結果に反映されたとも考えられる。

しかし、上昇した者も８名は５点以下であり、10 点の上昇を示した１名も正常域にあった。従ってうつ状態に陥った隊員はなかったと考えられる。

（3）航空機持ち込み手荷物

医療用器材の入ったケースを機内持ち込みとしたが、成田でこの中に入ったはさみがセキュリティーチェックに引っかかった。サイズはそれほど大きくないと言うことで問題なかったが、機内持ち込みケースの中身には外科用器材は含まれないようにしておく必要がある。

（4）医療用器材の置き場所

救助活動中は医療用器材を本部において、現場に出かけたが、連絡、搬送手段の確保が困難な状況では、緊急時には即応できない。このような状況下では医療用器材は救助チーム（医療班）が持ち歩くべきであったと考えている。

また、今回は宿泊場所が２ヵ所に分かれたため、医療チームのいない宿泊地の隊員の急病には全く対応できなかった。分散宿泊の場合は、夜間でも通信、搬送の手段を確保しておく必要がある。

（5）必要薬剤

今回の医療用ケースに含まれる薬剤は、現地住民を対象とした薬剤と同一のものであった。そのため、隊員の訴えに適切に対応できる薬剤が不足した。たとえば、下痢を訴える隊員のために整腸剤をと考えたが、これは含まれていない。症状が比較的強い一人には個人用として持参した薬剤を投与した。

今後、隊員のために使用する薬剤は国内で日常使用しているものに近い種類のものを準備する必要がある。

今後の出動には以下のような薬剤が必要と考えられる。

(24時間以内に後方搬送が可能であるとの前提で)

【内服】

鎮痛消炎解熱剤

バッファリン

ブルフェン

インダシン座薬

呼吸器系

ＰＬ顆粒

メジコン

メプチン

循環器系

アダラート

ヘルベッサー

抗生剤

セフスパン

クラビット

抗ヒスタミン剤

ポララミン

その他

複合トローチ明治

消化器系

ブスコパン

ガスター

コランチル顆粒

ビオフェルミンR

ロペミン

ラキソベロン

ボラギノールN座薬

鎮暈剤

メリスロン

外用

サンテマイシン点眼

リンデロンVG軟膏

デリマインクリーム

ゲンタシン軟膏

口腔用ケナログ

イソジンガーグル

湿布（MS冷湿布「タカミツ」）

【注射】

輸液

ラクテック	10B
フィジオゾール3号	10B

循環系

ボスミン	10A
アトロピン	10A
キシロカイン（静注用）	5A
ワソラン	5A
ペルジピン	5A

ミリスロール	5A
呼吸器系	
ネオフィリン	5A
中枢神経系	
ケタラール50	5V
レペタン	10A
セルシン	10A
消化器系	
ブスコパン	10A
利尿薬	
ラシックス	10A
マニトール	5B
抗菌剤	
ユナシンS	10V
トブラシン	10A
破傷風ヒト免疫グロブリン	3V
その他	
メイロン	10A
ソルメドロール（1,000mg）	3V

（6）名札

今回の隊員はすべて初対面であり、個人の名前を把握するのに時間が必要であった。個々が名札をつけてくれれば、個人の把握はかなりやりやすくなると考えられる。

4．まとめ

今回の派遣の大きな特徴は、日本から最も遠い地域の地震に際して多くの国よりも早く現地入りして 48 時間以内に救助活動を開始したこと、これに医療班を同行させたことである。医療班の同行は隊員の健康管理上は今後も是非必要と考えられる。しかし、派遣の日程から分かるように 24 時間遅れで行動せざるを得なかった。仕事の現場からそのまま成田へ直行できる救急隊員、警察官とは違って、民間組織に勤務する者は戸籍抄本の請求から始めねばならず、また、仕事の調整も個人的に行わざるを得ない。従って半日以上の遅れはやむを得ないが、救助チームの活動が現地入りしてから２～３日であることを考えると、より迅速な合流が必要である。

コロンビア国地震災害救済・救助チーム　体調管理
（　　月　　日分）

所属：消防・警察・その他（　　）

名前：　　年齢：

体調	症状
睡眠時間	（　　時間）
食欲	あり　・　普通　・　なし　その他（　　）
腹痛	なし　・　あり（症状　　）
下痢症状	なし　・　あり（症状　　）
便秘症状	なし　・　あり（症状　　）
尿の異常	なし　・　あり（症状　　）
頭痛	なし　・　あり（症状　　）
発熱	なし　・　あり（症状　　）
体のだるさ	なし　・　あり（症状　　）
四肢の痛み	なし　・　あり（症状　　）
胸の痛み	なし　・　あり（症状　　）
呼吸器系の症状	問題なし　・あり（ノドの痛み・咳・痰・その他（　　））
疲労感	なし　・　あり（症状：翌日まで残る・他　　）
その他要望、特記事項等	

別添1

別添２

日本版 SDS 回答用紙

No.　　Global Rating　1　2　3　4　5

姓名	男女	年　月　日検査	学歴
所属(職業)	未既(待)	年　月　日生	満年令

次の質問を読んで　現在あなたの状態に　もっともよくあてはまる　と思われる欄に　○印をつけて下さい。　すべての質問に答えて下さい。

	ないかたまに	ときどき	かなりのあいだ	ほとんどいつも	
1. 気が沈んで憂うつだ	○	○	○	○	
2. 朝がたは　いちばん気分がよい	○	○	○	○	（この欄は記入しない）
3. 泣いたり，泣きたくなる	○	○	○	○	
4. 夜よく眠れない	○	○	○	○	
5. 食欲は　ふつうだ	○	○	○	○	
6. まだ性欲がある（独身者の場合）異性に対する関心がある	○	○	○	○	
7. やせてきたことに　気がつく	○	○	○	○	
8. 便秘している	○	○	○	○	
9. ふだんよりも　動悸がする	○	○	○	○	
10. 何となく　疲れる	○	○	○	○	
11. 気持は　いつもさっぱりしている	○	○	○	○	
12. いつもとかわりなく　仕事をやれる	○	○	○	○	
13. 落ち着かず，じっとしていられない	○	○	○	○	
14. 将来に　希望がある	○	○	○	○	
15. いつもより　いらいらする	○	○	○	○	
16. たやすく　決断できる	○	○	○	○	
17. 役に立つ，働ける人間だと思う	○	○	○	○	
18. 生活は　かなり充実している	○	○	○	○	
19. 自分が死んだほうが　ほかの者は楽に暮らせると思う	○	○	○	○	
20. 日頃していることに　満足している	○	○	○	○	

©Zung, 1965, 1974, All Rights reserved.

下井俊彦　三京房発行

Ⅵ．業務調整員ロジスティックス報告

１．渉外・広報

●渉外

被災地では、到着時の現地関係機関（市民防衛庁（Civil Defense)、軍等）への表敬、打ち合わせのアレンジ、安全確保のための警備支援要請、各国チーム間連絡会議への参加等他ドナー等との調整、撤収時の関係機関への挨拶、機材供与式のアレンジ、後発医療チームとの連絡調整などを行った。

また首都コロンビアでは、コロンビア国外務省、災害対策本部、日本国大使館、ＪＩＣＡコロンビア事務所等への活動報告を行った。

特にＪＩＣＡ事務所においては、現場の被災状況の詳細を報告するとともに、今後の復旧のための技術協力の方向性について、協議を行った。

●広報

現地入りしている日本のマスコミ各社及び現地のマスコミからの取材依頼に対し、団長と相談しつつ、必要な情報提供を行うとともに、副団長、隊員の方々にも協力いただき、取材に応じた。

２．活動環境整備

●活動地の選定

アルメニア市民防衛庁（Civil Defense)の要請に応じ、主な活動地域を市役所周辺とすることとした。この辺りは、碁盤の目状に区画整理された市内の中心部にあたり、Carrera 通 15～16 番、Calle 通 21～23 番に位置する地区で、複数の生存者が残されていると思われる場所であった。

●災害対策本部の設置

コロンビア軍に申し入れ、日本チームの対策本部とするべく、第８軍駐屯地の１室を借り受けた。

本部では活動終了後、団長、副団長、隊長、業務調整員が集合し、それぞれの活動進捗及び懸案事項等を報告するためにミーティングを行った。また、同駐屯地では自家発電により行っており、複数の電源を確保することができたため、インマルサット、ＦＡＸ機及び活動記録作成用のパソコン等を設置するとともに、無線器等の充電を行った。日中は業務調整員１名が対策本部に常駐し、活動日誌を作成するとともに、ＪＩＣＡ本部国際緊急援助隊事務局、コロンビア事務所、その他関係機関との電話連絡にあたった。

●初動体制

救出活動の初動にあたり、活動地選定、迅速な燃料確保等に努めたものの、現地入りの時点では、業務調整員が２名体制であり、同時携行した救助機材はアルメニア空港から被災現地まで数回にわたりヘリコプターで運ばれることになったため、この間、１名は空港で待機することになった。またもう１名は、宿舎の確保に奔走したため、機材の積み下ろし等を救助隊員の方々に依頼することになった。

流通システムが完全に麻痺した状況下、救助チームが被災地入りしてから現地にて燃料確保にあたるのは、困難があるものと思われる。本邦から持ち込み可能な電池等はある程度の量を日本から携行したり、またオイル等は首都のボゴタで調達するといった措置をとるべきであった。

●救助作業中の業務調整

救助現場では、青年海外協力隊員らとともに生存者情報等について被災民からヒアリングを行い、適宜必要な通訳を行った。

３．移動・輸送

●往路（成田－ロス・アンゼルス－ボゴタ）

出発便シンガポール航空 12 便は、定刻の 18：15 から約１時間遅れて成田空港を出発した。

経由地ロス・アンゼルスでは、ロス・アンゼルス領事館の大野寿久領事他の出迎えをいただいた。また、この間、緊急援助隊事務局と連絡をとったところ、被災地では夜になると冷え込む可能性が高いことが判明したため、急遽空港内で防寒具を調達した。

往路では、160 個を上回る荷物（救助用機材、スーツケース等）を預け、その他ＯＡ機器、個人荷物を機内持ち込みした。被災地アルメニアは首都からおおよそ約 200 km（直線距離）、アクセスが良いとはいえない条件のもと、途中ロス・アンゼルス空港、ボゴタ空港、アルメニア空港をへて被災地入りする間に、何度も荷物の積み降ろし、個数確認があり、隊員の方々に大きな負担となったものの、紛失する荷物もなく、全て被災地アルメニアまで全量を同時携行することができた。

●コロンビア国内、被災地にて

被災地では、移動及び機材輸送のために、トラック２台を軍隊から借用するとともに、アルメニア市内で車輌を確保することはかなり困難な状況であったため、アルメニアから約 150 km（直線距離）のカリ市にてタクシー２台とミニバス１台を確保した。これら車輌は、宿舎と活動地の往復の他、タクシー、ミニバスは食糧品の買い出し、関係機関との協議の場への移動に用いた。

宿舎と活動地の間の移動時間は、片道１時間程度かかり、途中、警備のため検問所が設けられているところが数カ所あった。救助隊員は、２台のトラックに、警察チーム、消防チームが分乗し、移動した。また、首都ボゴタでの車輌手配は、すべてＪＩＣＡ事務所に依頼した。

●帰路（ボゴタ－ニューヨーク－成田）

ボゴタからニューヨーク向けフライトは当初 16：45 発の予定だったが、ＡＶＩＡＮＫＡ航空が大幅に遅れ、最終的に 19：30 に離陸となった。さらにＪＦＫ空港が濃霧により閉鎖されたため、一時フィラデルフィア空港に待機するというトラブルがあった。結果としてニューヨークＪＦＫ空港に着陸したのは翌朝５：00 過ぎになった。ＪＦＫ空港では、６時間以上も遅れた到着にもかかわらず、安川領事を始めとしたニューヨーク総領事館の出迎えと協力を得て、空港近くのホテルに移動した。３時間という僅かな時間ながら休息を取った上で、同日 12：10ＪＦＫ発のＪＡＬにて成田には翌日２月４日 16：00過ぎに到着した。

この間の移動にかかる荷物個数確認、ホテル及びフライトのチェックインはＪＩＣＡ事務所、大使館、チーム隊員の協力を得て、迅速に行われた。

４．機材管理

携行資機材の管理は、盗難等の被害に遭うことが予想されたことから、災害現場近くに保管施設を確保することは困難であり、宿舎に保管することとした。宿舎と救助現場の往復は、軍隊から借用したトラック２台で行った。

また、携行した機材のうちで、現地アルメニア市にて引き続き活用可能と思われる機材を、コロンビア市民防衛庁（Civil Defense)及びアルメニア消防署に供与した。

５．生活環境整備

●宿舎

アルメニア市中心部に宿舎を確保することは、物理的にも、また治安面においても困難な状況であったため、中心部から車輌で１時間弱程度離れた郊外の農家２棟を借り上げ宿舎とした。団長、救助隊員、業務調整員、大使館員、青年海外協力隊員他総勢 40 名以上になる関係者全員を収容する宿舎の確保が困難であったため、２カ所の農家（ブラジリア、フランチェスカ）に分かれて宿泊することとした。

宿舎では、電気、水道等の基本的なライフラインが寸断されており、日が暮れてからはろうそく、懐中電灯による生活を余儀なくされた。トイレやシャワーには、農場のプールに溜まった水を利用した。

●食事

食事は自炊となった。アルメニア市に隣接するカリ市から食糧、飲料水を調達し、青年海外協力隊員に警察チームの宿舎となったブラジリアにて、食事の用意をしてもらうよう依頼した。流通が完全にストップし、十分な食材が得られない状況の中で、栄養士の青年海外協力隊員に炊事を担当してもらったことは、救助隊員の栄養面でも心強かった。

●治安

日を追うにつれて治安が悪化し、宿舎周辺で銃声がすることがあったものの、アルメニア市警察による警備員及び番犬による警備を配置し、トラブルに巻き込まれることはなかった。

●健康管理

平成８年10月にエジプトのビル崩壊に際し派遣した救助チームの教訓を踏まえ、今回初めて、救助チームの顧問として医師１名、看護婦１名の同行を実現し、隊員の健康管理を行った。具体的には健康チェック表の記入と血圧測定であるが、今後は活動条件に即したチェック項目設定と、実施のタイミング等を改善していくべきと思われる。

今次オペレーションでは、救助隊員１名に軽い風邪の症状が見られた他は、大きな怪我、病気もなく、活動を終えることができた。

●物資調達等

生活に必要な物資のうち、飲料水と食料（かんぱん、缶詰他）、雨合羽は、首都ボゴタ、近隣のカリ市、ペレイラ市で調達した。その他軍からも非常用食料を供与された。宿舎は停電が続いたため、ろうそくと懐中電灯を調達した。（カリ及びペレイラより調達したもの：水（500ml）500本、乾電池500 本、バケツ、トイレットペーパー、缶詰、コーヒー、清涼飲料水、米、醤油、塩、砂糖、ジャガイモ、サツマイモ、バナナ、飴等）

６．報告・記録

●報告

現地では通信インフラも壊滅的な被害を受け、電話線も遮断されていたため、無線、インマルサットが極度の混線状態に陥り、安定した通話状態を確保することが難しい中での対策本部の立ち上げを余儀なくされた。しかしその後携行した２台のインマルサットの受信、着信を可能にし、定期連絡をできる体制を整えた。ただし、ＦＡＸ、E-MAIL による通信は、度々試みたものの、通信に必要な online 容量を確保することが困難であった。

そのため、本部緊急援助隊事務局への定期報告は口頭のみで行い、救出活動期間中の活動日誌

は、首都ボゴタに移動したあと、まとめてＦＡＸを送るという形をとった。

●記録

日々のミーティングで報告された救助活動の様子を取りまとめ、活動日誌を作成して本部に連絡した。

visual な記録の作成については、カメラ、ビデオを用いて行ったが、業務調整員が常時救助活動の現場に張り付くことが困難な状況であったため、ＪＩＣＡ事務所ローカルスタッフ等に記録機材を分担配布して対応した。今後は記録要員の確保が必要と思われる。

７．その他

今回のオペレーションでは、チーム派遣時における業務調整員のリクルートに手間取り、業務調整員４名のうち、日本から先発した１名及びコロンビア事務所１名、計２名によって活動を開始し、他の２名は翌日からの活動となった。そのため、救助隊到着後の初動時にロジ要員が不足した。また、現地活動期間を通じて、救助活動とロジスティックスそれぞれへのマンパワーの投入量を比較すると、圧倒的にロジスティックスへのマンパワー投入が不足していたと判断される。

また、今回はこれまでの緊急援助オペレーションと異なり、生存者救出が十分可能な震災後の早い時点で現地入りしたため、水、電気、食料、宿舎、輸送手段を事前に確保しておくことが極めて困難な状況で活動を開始することになった。通信手段の立ち上げ、輸送手段（車）、水、食料の確保、宿舎の手配、活動地の選定も現地入りしてから行なった。

今回の経験を踏まえ、今後はサバイバル状況（水、電気なしの状態）を前提とした自己完結型オペレーションのためのロジ業務の整理と訓練が必要である。そのため、帰国後、救助隊員の方々にご協力いただき、救助活動全般、派遣全般及び支援体制にかかるアンケート（別添１）を実施した。このアンケート結果（別添２）を踏まえ、今後、より迅速で効率的、効果的な緊急援助の実現にむけ、支援体制の強化を中心とした取組がなされることを期待する。

最後に、今までにない過酷な条件下のオペレーションにおいて、救助隊員、現地大使館、ＪＩＣＡ事務所、その他多くの方のサポートを得て、全員が一丸となって活動し、また大きなトラブルにも見舞われず、無事活動を終了して帰国できたことを感謝している。

別添1

JICA国際緊急援助隊事務局松浦由佳子行（FAX NO.：03-5352-5400）

コロンビア国地震災害救済国際緊急援助隊・救助チーム・アンケート

ご所属：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　氏名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（無記名可）

●救助活動の実施について	
不足資機材・物資	＊活動資機材・物資（今後の検討のため、仕様、メーカー名、メーカー担当者・連絡先、同等品の銘柄等について、わかる範囲でご記入頂ければ幸いです） ＊個人装備（同上）
活用した資機材（個人装備含む）	＊活動資機材・物資（使い勝手についてコメントがあれば、ご記入下さい） ＊個人装備
不要だった資機材（個人装備含む）	＊活動資機材・物資 ＊個人装備
故障した機材とその対処方法	＊活動資機材・物資 ＊個人装備
救助活動全般	＊人数の過不足、チーム編成、任務分担、活動内容、活動時間等

●生活面について	
不足していた生活資材・物資	
食事	
宿舎	
健康管理	＊先生、看護婦に健康相談を受けましたか？ ＊チェックリスト記入についてのご意見をお願いします（提出時期・回数・チェック項目等） ＊活動中の健康状態及び自己管理について、お聞かせ下さい
●派遣全般・支援体制全般について	
派遣前のJICAの支援について	＊成田空港で配布した資料は役に立ちましたか？（活用／不要箇所等） ＊今後の派遣にあたり、出発前に必要な対応等についてご意見をお願いします
現地でのJICAの支援体制について（協力隊員含む）	＊現地での支援体制は十分でしたか？（よかったこと、今後改善が望まれる事項等）
平時の支援体制について	＊今後の訓練・研修の中に盛り込むべき教訓・知識等ありましたら、ご記入下さい ＊機材習熟訓練、リーダー研修受講歴についてお聞かせ下さい 機材習熟訓練：　なし　・　あり（　　年　　月） リーダー研修：　なし　・　あり（　　年　　月） ＊機材習熟訓練・リーダー研修を受講されたことのある方に伺います。訓練で得た　知識・技術は今回の活動でどの程度役に立ちましたか？
●その他、ご意見・ご感想を自由にお書き下さい。	

お忙しいところ、ご協力いただきありがとうございました。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

コロンビア国・救助チーム・アンケート集計結果

●救助活動の実施について	
不足資機材・物資	＊活動資機材・物資（今後の検討のため、仕様、メーカー名、メーカー担当者・連絡先、同等品の銘柄等について、わかる範囲でご記入頂ければ幸いです） ●３名以上の指摘のあったもの（指摘の多かった順） 電池（単一～単四）／スコップ・つるはし／鉄線鋏／投光器（バルーンライトの導入含む）／削岩機（台数増含む）／無線機・トランシーバー／初動時の燃料／ ●１～２名の指摘のあったもの（順不同） エアーテント／冷暖房器具／各資機材用燃料／食糧　／万能斧／測定器具／鉄筋カッター／防水シート／休息用エアマット／ホートハリー／熱画像システム／フロアイ／ボーカメ（増）、遺体覆／燃料携行缶（フィルター付）／自活用ドームテント（休憩、資機材管理用）／破壊用機材の数量不足・種類不足（２種類欲しい）／エアージャッキ開閉バルブ／ ＊個人装備（同上） ●指摘数順 雨具／小型強力ライト／防寒具（ゴアテックス）／安全ベルト／ヘルメット装着用ライト（防水性）／防塵マスク／テブラ手袋／安全ベルト／トラメガ／千徳ナイフ／ホシェット・ウエストホーチ／靴／ディスホ／携行用フラッシュライト／バケツ／携行警報器
活用した資機材（個人装備含む）	＊活動資機材・物資（使い勝手についてコメントがあれば、ご記入下さい） 救助用機材（シリウス、棒カメ、地中探査等） 破壊用機材（削岩機、エンジンカッター、ストライカー、ハンマー） 搬送用機材（救助用タンカー） その他スコップ、斧、投光器、無線機等 特に、「スコップ、つるはし等が簡便で活用度が高く、またボランティアへの貸出等連携活動にも効果的なため、数量を増やすべき」との意見が散見された。 ＊個人装備（順不同） 防毒マスク／強力ライト／防塵メガネ／ケフラー手袋（消耗激しかった）／ヘッドランプ等
不要だった資機材（個人装備含む）	＊活動資機材・物資 空気式救助器具／エアーマイティ／ファイバースコープ／エアソー／電動鉄筋カッター（順不同） （その他コメント） ・今回の被災現場では、大型資機材の活用機会がなかった棒カメの普及によりファイバースコープ（旧式）は不要。 ＊個人装備　特に指摘なし
故障した機材とその対処方法	＊活動資機材・物資 投光器１機（燃料不良のため、エンジン部分からの燃料漏れ、発火、活動期間中の修理は不可だった）／レスキューツール（メンテナンス要）／削岩機 ＊個人装備 ヘルメットがフリーサイズで、インナー調節ができず、フィットしなかった。また、着脱部分のチャックが錆び付き、着脱が困難なものもあった。
救助活動全般	＊人数の過不足、チーム編成、任務分担、活動内容、活動時間等 （人数）３０名でちょうど良かった／２４時間体制で活動する場合、最低６名×６班体制が必要（１２名×２班×３時間：３交代制、災害現場の直近に司令本部・宿舎が確保されることが条件となる） （期間）もうすこし長く活動したかった（期間、１日の活動時間） （要員確保）広報隊員確保／記録要員の確保／ロジ要員不足／安全管理隊長の確保要／要救助者を対応のための救急救命医師、救命士をメンバーにいれてはどうか／記録要員の確保 （装備・機材）個人装備面で、現場で初動時に使用する防塵マスク、懐中電灯、ケフラー手袋、雨具等がすぐに使えるような工夫が必要／発電機、エンジンカッター等のメンテナンス要／資機材整備の向上要／所属により機材の取扱いに多少の差が出た （その他）活動エリア、要救助者に関する正確な情報入手の必要性／今回のように支持点が少ない時の救助活動は、工作車を活用した活動が有効だったのでは。

●生活面について	
不足していた生活資材・物資	（指摘の多かった順） 懐中電灯／ユニフォームの替え／身一つで出動できる体制整備の必要性（下着、着替え、防寒着、雨具、運動靴等）／アーミーナイフ／水のいらないシャンプー／うがい薬／洗浄綿／蚊取線香・防虫スプレー／布製バケツ／簡易バケツ／水／固形燃
食事	口に合わないものがあった／協力隊員にまくやってもらった／レトルト食品要
宿舎	（指摘数順）被災地のため電気、水等に不自由するのは当然である／バスタオル、スリッパが必要／現場から遠かった
健康管理	＊先生、看護婦に健康相談を受けましたか？（受けない／多少相談した／数回相談した） （指摘数順）血圧測定のみ／相談にのってもらえなかった／親身になって対応してほしかった ＊チェックリスト記入についてのご意見をお願いします（提出時期・回数・チェック項目等） 災害救助用の内容であったのか疑問／意味がない・内容がわかりずらい／この程度で良い ＊活動中の健康状態及び自己管理について、お聞かせ下さい 風邪薬、消毒液の携行／降雨等による温度管理に配慮／飲料水・食事に注意／うがいの励行／自己管理の難しい生活条件であった／5kgやせた（順不同）
●派遣全般・支援体制全般について	
派遣前のJICAの支援について	＊成田空港で配布した資料は役に立ちましたか？（活用／不要箇所等） 大変役にたった／良かった／スペイン語は災害向けの救助に必要な用語にすべき／日常会話が役にたった／現地では活用する時間なし（順不同） ＊今後の派遣にあたり、出発前に必要な対応等についてご意見をお願いします。 （事前の情報提供が必要なもの） 生活様式等についての情報（トイレ、食事、人間性、治安等）／被災国の気候・風土・建築構造等の情報／現地での災害対応機関の情報／現地調達資機材リストの配布／資機材に諸元表を添付してほしい（安全限界を把握するため） （中長期対応） 「立入禁止」「この付近は危険です」「この付近に生存者・要救助者がいますか」等の基本用語について、派遣が予想される国の言語（英語、スペイン語等）の単語札の導入を希望。／事前の予防接種について対応希望
現地でのJICAの支援体制について（協力隊員含む）	＊現地での支援体制は十分でしたか？（よかったこと、今後改善が望まれる事項等） 十分であった／水・電気の途絶は当たり前と認識しているので不自由はなかった （改善点） 今後、災害直後に現地入りを想定して、本邦調達及び現地調達アイテムの整理が必要／初動時の迅速な車輌確保が重要／通訳の拡充希望／現地調達物資の手配の効率化／
平時の支援体制について	＊今後の訓練・研修の中に盛り込むべき教訓・知識等ありましたら、ご記入下さい。 資機材習熟訓練の充実（eg.ペットボトルを使った資機材の燃料の混合等被災地の状況強を想定したもの）／重機と連携したガレキの排除訓練（安全管理）／資機材の修理技術／自己完結型の訓練／被災国の文化・生活様式等の情報提供／語学（英語）研修／研修機会の増加 ＊機材習熟訓練、リーダー研修受講歴についてお聞かせ下さい。 機材習熟訓練：　あり３名　／　リーダー研修：　あり２名 ＊機材習熟訓練・リーダー研修を受講されたことのある方に伺います。訓練で得た　知識・技術は今回の活動でどの程度役に立ちましたか？ 異文化理解、想定訓練、健康管理、安全管理が役にたった
●その他、ご意見・ご感想を自由にお書き下さい。	
（移動について） 被災地までの移動が重労働となった／政府専用機の活用を期待する／機材の梱包形態を工夫すべき（コンテナ方式等）	

Ⅶ. 総括

●白川団長（外務省）所感

今回のコロンビアのアルメニア地震災害に対する国際緊急援助隊救助チームの活動終了に際し、団長としての所感を次のとおり報告申し上げる。

1．第一に特筆すべきことは迅速な現地入りを果たしたことである。

生存者救出を第一目的とする救助チームにとっては、迅速さが決定的な重要性を持つ。生存の確率は、災害発生後、時間の経過とともに著しく低下し、72 時間（３日間）が限度と言われる。

今次チームは、災害発生後、42 時間弱でコロンビアの首都ボゴタに、被災地アルメニア市には 48 時間後に到着、52 時間後には現地での作業を開始している。成田出発からボゴタ着まで太平洋を渡り更に９時間近く南下し約 27 時間の時間をかけていること、また、今次災害で、米国、メキシコ、ヴェネズエラ、英国、独、仏、スペイン、ロシア等日本より地理的に近い多くの国が救助チームを派遣したが、わが国チームは、米国チームと並んで現地に一番乗りしていることを見れば、わが国がいかに迅速に対応したか明らかである。これは、災害発生後早い段階で、かつわが国が早期で相手国側とも連絡しうる時間帯で情報をキャッチできたこと、コロンビア政府に対する積極的な働きかけ、主要な隊員派遣元の消防・警察機関の迅速な対応等、いくつかの条件が揃ったお陰ではあるが、遠隔地の南米にも十分生存者救出可能な時間内にチームを派遣し得た意義は大きい。なお、最初に派遣決定され出動したチームとしてマスコミでも頻繁に取り上げられ、広報上の効果も大きいものがあった。

2．生存者救出という悲願達成の大きな期待を背負っての今次救助チームの派遣であったが、残念ながら、この願いは叶えられなかった。具体的な救出活動の結果は５人の遺体収容であった。これは、崩壊した建築物構造が脆弱なため生存し得る空隅が殆ど残されておらず、生存者救出件数が全体としても極めて少なかったこと、側聞するところ、米国チームの３日間の活動結果が１遺体の収容であったこと等を勘案すれば、相当の結果であったと思われる。

いずれにしても、より重要なことは、収容した数の問題ではなく、援助チームがいち早く現地に入り、誠意を込めて救出活動に汗を流し、その存在、活動が広く認められ評価されることであり、その意味でも本チームは所期の目的を十分達成したといえよう。

3．撤収時期について、29日コロンビア当局が、救出活動の状況、それまでの結果等を踏まえ、救出活動を同日をもって終了するとの方針を決定した。これは、救助チームの目的から見て、現地活動は3日間程度であろうとの当チームの当初からの判断とも一致している上、撤収作業に移るための時期選定の問題を解消してくれた。

4．活動終了に際し、一部携行機材を供与することになったが、東京側の迅速な許可に感謝する。被災の大きさや現地で特に中心的役割を果たすべき消防署が壊滅し、所有機材の全てを失い手作業に頼っている状況に鑑み、供与機材は極めて重宝がられ、活用されることと確信する。また、供与式には、キンディオ県知事、アルメニア市長、Civil Defense 長官等現地の災害対策実働組織の最高責任者が顔を揃え、当チームの活動のみならず、医療チームの派遣、援助物資供与等わが方の緊急援助をアピールする極めて有益な機会となった。

5．今次災害では、わがチームが早い段階で現地入りしたこともあり、災害の傷跡が生々しく残っており、交通は極度の混乱・渋滞、通信機能は麻痺状態にあり、現地での移動、通信、補充物資の調達等で種々困難があった。また、生活環境も、水、電気が全く途絶えた状態が続き、本邦出発以来、機中2泊を含む 30 時間にも及ぶ移動の旅の後、休む間もなく激務に従事する隊員にとって誠に厳しいものがあった。消防チーム、警察チームとも各隊員は北出、渡邊両副団長の見事な統率の下、一切不平不満を漏らさず、明るく元気に任務に邁進してくれた。これを支える上で、大使館、ＪＩＣＡ職員の働きは勿論のこと、３人の青年海外協力隊員及び日本人を夫に持ち現地で自主的に参加した一人のコロンビア人女性の協力も大きな力となった。

6．今回の経験を振り返り、本来、厳しい環境条件の中での、特に今回のような大使館、ＪＩＣＡ事務所のない地方における緊急援助活動を更に充実させるために、ロジスティック体制面で改善・強化すべき余地が多々残されていることを痛感させられた。

●北出副団長（消防庁）所感

1．消防チームの編成について

国際緊急援助隊の消防チームは、全国の 40 消防本部に所属する、世界のトップレベルの救助技術を有する 501 名の救助隊員で構成する国際消防救助隊員の中から編成される。

このため、生存者救出を目的とするチーム編成を迅速的確に行うため、国際消防救助隊編成計画をあらかじめ作成し、協力市町村の消防長に通知してある。

26 日 13 時に外務省から消防庁に入った要請内容は、ロス・アンゼルス行き旅客機の最終便（18 時 15 分発）で出発するため、10～15 名の隊を編成し、出発の２時間前に成田空港に集合されたいというものであった。

これを受けて、前述の編成計画により当日の第一順位に指定されている、東京消防庁、千葉市消防局、大阪市消防局及び船橋市消防局の隊員による編成作業が進められた。

複数の消防機関の救助隊員により消防チームを編成するにあたり、隊の規模が確定しないと個別協議に入れないため、最初に大阪市消防局に対し２名の隊員を時間内に派遣可能か打診したところ、即座に可能であるとの返答を得たため、すぐに参加を要請した。

その後、外務省から 15 名の確定報が連絡され、消防庁は、13 時 29 分には派遣隊員の階級の調整を含めた編成作業を完了した。

また、16 時 40 分には隊員２名が乗った大阪市消防局の消防ヘリコプターが成田空港に着陸し、同 55 分、15 名の隊員は結団式会場に集結を完了した。

2．現場活動の終了について

救助活動３日目の 29 日には、日本チームは７時 15 分に現場到着し、消防チームと警察チームに分かれて２つの現場で作業を開始した。

また、10 時から開催された各国救助チーム代表連絡会議において、Civil Defense の責任者から、救出活動を本日限りで終了する方向で調整を進めたいとの意向が示され、日本チームにとっても最後の救助活動の機会となった。

消防チームは、地階を有し比較的生存の可能性が高いと判断した第三現場で検索活動を進めた。この現場は一棟のホテル（地上５階・地下１階）の半分が倒壊したもので、隣接する残存部分も倒壊危険が大きく、立入禁止措置が講じられていた。

消防チームは２班に別れ交代制で作業に当たり、午後には、第三現場から少し離れた場所で道路啓開作業に従事していた民間企業の重機と連携した検索活動を進めた。

重機の作業中は生存者につながる事物の出現に注意をこらし、また、重機の作業が一段落するとファイバースコープやストライカー、削岩機等を駆使して検索活動を続けた。

夕刻近くになって突然、隊員が現場周辺の被災建物から明瞭なきしみ音を聞き、また、警戒

担当の隊員が、ホテルの残存部分上部の壁体に亀裂が発生・拡大するのを発見した。
直ちに作業を中断させ活動内容を検討した結果、亀裂の発生等には重機の振動が関係し、また、亀裂が生じた壁体等の直近に検索目標があり残存部分の崩落対策を先行する必要があることが明らかになり、検索活動を中断して監視警戒の任務に移行した。
30 分ほど過ぎた頃、アルメニア消防署幹部が現場巡視に訪れたため、状況を説明し所用の対策を申し入れたところ、直ちに前面道路の通行を禁止し、また、残存部分の撤去処分を行う権限を有しており早速手配するとの返答を得た。
撤去作業が進むと検索活動が再開できるため作業見通しを確認したが、直ぐには目処がたたないとの返事があり、第三現場の検索活動の再開は断念した。
続いて、警察チームの第一現場及び第二現場の状況を消防署幹部に説明した。
第一現場では、重機と連携した捜索が進められたが、重機がラジエーターの過熱破損により立ち往生し、事実上作業不能となった。
このため、日本チームは第二現場において警察チームと連携作業中の重機が日没により作業を終えた時点で当日の活動を終了する旨を伝え、了承された。
19 時を以て、日本チームは停電が続き真っ暗になった現場を引き上げた。
また、21 時に当日２回目の各国チーム間連絡会議が開催され、Civil Defense より、生存者救出活動は本日をもって終了する旨通知された。

３．多くの協力者について

先ず、救助チームに参加し奮闘したＪＩＣＡの鈴木業務調整担当にお礼申し上げる、特に、鈴木氏がロス空港で購入し機内で手渡した現地の新聞は、被災地の写真が満載され、被災状況の把握、現地活動の要点、行動計画等を機中で検討する際の貴重な資料となった。
次に、アルメニア市で後方支援体制を整え救助チームと行動を共にされた在コロンビア日本大使館の方々及びＪＩＣＡ事務所の方々等にお礼申し上げる。特に、今回はコロンビアやスペインの災害救助犬チームと連携し、また、コロンビアの民間事業所の重機と一体となって検索活動を進めたが、その長時間の通訳を務められたことにより、救助チームは、危険な災害現場でカウンターパートと十分な意思疎通を図りながらその救助技術を十分に発揮できた。
また、吉永医師と警察チームの隊員にお礼申し上げる。海外の災害現場で生存者の救出を目的とした救助活動を進める際、日本の救急医療の専門医が行動を共にされることの安心感は極めて大きく、救助隊員の志気を大きく高めた。一方、日本チームに割り当てられた４つの活動地域での救助責任を果たすため、警察チームとは、各地域の状況に応じ合同また分担して、効率的な検索救助活動を進めた結果、相当の成果を得ることができた。
ところで、国際緊急援助隊の消防チームの母体となる国際消防救助隊の隊員は現役の特別救

助隊員又はその経歴を持つ幹部職員等であり、14 名の隊員の中には当務中の者も多く、火災現場から成田空港に向かった隊員もいる。

今回の任務が無事完了したことは、14 名の優れた隊員の編成にご尽力いただいた 4 消防機関幹部の方々、後方支援体制を組み各隊員の心強い支えとなった方々、及び隊員の突然の派遣に伴い生じた特別救助隊の体制確保等の補完業務にご協力いただいた多くの職場仲間の方々のお力添えによるものである。

最後に、細田隊長を始めとする 14 名の隊員に感謝申し上げる。消防チームは、細田隊長の見事な統率の下、明るく元気に任務に邁進し、その高度な資機材を駆使した救助技術と要救助者への誠意あふれる献身的な活動に対し、各国報道陣の高い関心と地元市民等の深い感謝及び共感が寄せられ、日本チームの活動に多くの自発的支援を得たことも印象深い。

●渡邊副団長（警察庁）所感

1月25日午後1時19分（日本時間1月26日午前3時19分）、南米コロンビアで発生したマグニチュード6の地震災害に、警察チームの引率責任者として派遣された。今回の救助チームの派遣は、要請（打診）を受けてから僅か数時間で日本を出発した。要請から出発まで、過去4回の派遣でも経験したことのない、まさに訓練以上の迅速な出発であった。さらに、警察チームは、阪神淡路大震災を経験した隊員を中核とする大阪府警、兵庫県警からの阪神の精鋭部隊であり、非番、週休の隊員もいれば、出動中の現場から着の身着のままで成田に集結した者もいた。こうしたあわただしい出発から長時間のフライトの後、連続しての現地での救出活動とめまぐるしい派遣であった。しかし、終わって見れば、「本当によくやった。」「すばらしい国際貢献ができた。」と各方面から高い評価をいただき、一同感激もひとしお、充実感もいっぱいといったところである。

次に、今回の派遣について感じた点である。

その1は、迅速な集結・派遣（出動）である。

今回の迅速な派遣・救出活動について、各方面から評価をいただいたが、警察チームも要請当日に出発した前例がなく、また、今回の派遣部隊は、阪神淡路大震災の中核として活動した大阪府警・兵庫県警のチームであったので、集結時間に間に合うかという問題もあった。しかし、大阪府警、兵庫県警の積極的な協力はもとより、警視庁によるヘリコプターの輸送応援、千葉県警の空港における側面支援等を得て、要請から僅か数時間で出発できたことは、今後の派遣に向けて大変な自信になったし、国際緊急援助隊制度発足から過去10年余り、機材習熟訓練には出るが実働のなかった関東以外の部隊を派遣したことで、未だ派遣のない府県警察隊員の志気も高揚しており、このような面からも今回の派遣は大変意義のあるものであった。

機中2泊となる30時間にも及ぶ移動の後、災害発生後48時間程で被災地アルメニアに到着し、首都ボゴタからさらに被災地アルメニアに移動し、概ね50時間後には、米国に次いで救出活動を開始したにも拘わらず、生存者の救出ができなかったことはやや悔やまれるが、5名の犠牲者の遺体を発見・収容できたことは立派な実績であると思う。中でも初日の2番目に収容した遺体が死後3時間程しか経っていなかったことは、本当に残念であった。

その2は、日頃の訓練の成果を十分に発揮できたことである。国際緊急援助隊では、年2回、機材習熟訓練を実施し、隊員に対する救出機材の使用方法、メンテナンス等について指導・教養を実施している。警察でも、全国の9都道府県警察から国際緊急援助隊員として490名を指定し、毎回指定隊員の代表が訓練に参加し、他の隊員に伝達するとともに、また、独自に訓練を実施するなど技術の共有化と全体のレベルアップに努めている。被災地においても、その訓練を活かして、被災地の厳しい環境の中で、冷静な判断による適切な活動を行うことができた。特に、警察チームの大半が阪神淡路大震災において救出活動等を経験した隊員であったことから、現場

の状況を冷静沈着に判断し、的確な救出作業を実施するなど被災現場の状況にスムーズに対応できたことも成果のあった要因である。さらに、ロジの面でも、現地では、水、電気、飲食等の不便はあったが、「大震災」当時の経験や、後方支援の厳しさを身を持って体験していたため、ロジの困難性をよく理解しており、隊員誰一人として不平、不満を言う者がなく、逆に「屋根の下で休めるだけでも……」等と慰められる始末で、このような高い志気で活動できたことについても、本当に隊員に感謝したい。

一部反省点として、ロジ面における後方支援体制の強化の必要性や、現地での機材の搬送方法、及び生存者に関する情報の確認方法等の問題点もあったが、現地での日本チームに対する多くの期待と声援、感謝の声等に接し、生存者の救出には至らなかったが、精一杯やって国際貢献できた誇りと達成感・充実感を感じている。

また、２月４日付けの産経新聞で、「日本の国際緊急援助隊については、（中略）地球の裏側からの素早い対応が強い印象を残した。日本は災害援助に熱心なのだが、いつの場合も対応の遅さが批判されてきた。いつの間に、日本はこんな立派な国際貢献ができるようになったのだろうか。」という記述があった。改めて迅速な派遣の必要性を痛感し、今回の決断の早さに敬意を表したい。

最後に、自ら「スペイン語」を駆使して、相手国の政府、軍、災害対策本部関係者等と連絡・調整を行い、適切な指示をして頂いた白川団長はじめ、後方支援でご苦労頂いた大使館、ＪＩＣＡの皆様に感謝するとともに、現場で苦労をともにした消防チームの皆様に御礼申し上げます。